

# 高校の大学進学指導環境の悪化に関わる要因分析

倉元直樹, 宮本友弘, 林如玉

東北大学

## 1. 問題と目的

中教審(2014)によって、いわゆる高大接続改革と称された入試改革が可視化されて以来、わが国の大学入学者選抜をめぐる環境は大きく揺れている。導入年度とされた2023(令和3)年度入試が、本格的に実施に入ろうとするタイミングの直前にあたる2021(令和元)年11月頃から目玉政策であった英語民間試験の導入、共通テストへの記述式問題の導入、J-e-Portfolioの導入による受験生の学修履歴を用いた主体性を指標とした選抜、といった改革の3本柱が次々と撤回となった。文部科学省は直後の2021(令和元)年末には「大学入試のあり方に関する検討会議」を立ち上げ、1年8か月ほど提言をまとめてこの問題には一応の決着を見た(大学入試のあり方に関する検討会議、2021)。

高大接続改革の一連の経緯は目に見える形での高校教育環境に動揺をもたらしたが、それ以外にも高等学校の教育環境が厳しくなる要因は枚挙にいとまない。例えば、進行する少子化は地域差の拡大をもたらしている。40年にわたって続く大学入試多様化政策によって大学入学者選抜の現場は実質的にカオス化した。その結果、大学進学に関わる指導事項は生徒の志望によって極めて多岐に渡るようになった。さらに、国公私立大学全体の一般選抜による比率が5割を割り込んだことから、昨年(2023[令和5]年)半ばころからマスメディアで盛んに「年内入試」ということばが用いられるようになった。その影響により受験生や保護者、高校教員の意識が、選抜方法が複雑化している学校推薦型選抜、総合型選抜への志向性がより強くなるように誘導されていると推測される。2022(令和4)年度から年次進行で進んでいる新しい指導要領では、探究学習がこれまで以上に奨励され、観点別評価の完全導入も行われた。授業や評価の一つひとつに時間と手間と時間がかかる変更が並行して進んでいる。

このように大学進学指導をめぐる業務量が爆発的に拡大している反面、初中等教育に従事する学校教員の職場の長時間労働が社会問題化して労働時間に制限が加わるようになった。教育委員会や管理職の方針によっては、従来、標準的に行われていた指導が出来なくなっている現状も見られる。教員志望者の減も社会問題化している。教育現場に「ブラック職場」というレッテルが貼られて過重労働のイメージが広がったことも、大きな原因となっていることが否めない。

以上、外形的には高等学校における大学進学指導を取り巻く環境要因は悪化の一途をたどっているように見える。一方、当事者である高校教員はこの状況をどのように捉えているのだろうか。また、東北大学は個別大学として入学者選抜制度を調整し、進学指導環境の悪化への対策を採ってきたが、それはどのように受け取られているのだろうか。本研究は東北大学入試センターが例年実施している高校教員への調査データを用いて、この2つの課題に関して実証的に解明を試みる。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象

例年の調査に準じ、特別支援学校を除く全国の高等学校、中等教育学校及び高等専門学校5,047校のうち、東北大学に志願者、合格者を多数輩出する高等学校等348校を調査対象とした。選定基準は2014(平成26)年度～2023(令和5)年度入試を通じて合格者数13名以上の高等学校、中等教育学校とした。一部に入れ替わりはあるものの、大半の調査対象校は例年ほとんど重複している<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 本調査の実施までの倫理審査関連手続きは倉元他(2019)に準ずる。東北大学における全学学部入試関係の会議(非公表)の審議の資料を収集するための調査と位置付けられている。実施主体の上位組織における研究倫理規定である「東北大学

## 2.2. 調査方法

例年と同様、質問紙調査とした。調査票は A4 判両面 1 枚である。東北大学の入試に対する認知及び関心に関わる質問が 2 項目、進学指導を取り巻く環境に関する項目<sup>2</sup>が 31 項目（分析対象は 29 項目<sup>3</sup>）、さらに「特に大きな影響を与えた」項目を 3 項目挙げ、自由記述でその理由についての記述を求めた。加えて総括評価 1 項目<sup>4</sup>が大学進学指導を取り巻く環境に関する質問である。さらに、東北大学の入試改革に関する評価が 6 項目<sup>5</sup>、最後に、本稿の分析対象とはしないが現在の東北大学の入試設計と改革方針に関する疑問や不安の有無が 1 項目加わっている。実施方法は前回調査（倉元他、2023）と同様である。郵送で調査票を送付し、回答用特設 WEB サイトに QR コード等を通じてアクセスしての回答を標準とした。その他、電子メール、FAX 及び郵送による回答も可とした。調査票は MS-Word 版と一太郎版を用意し、ウェブサイトからダウンロードして入力することも可能とした。

2024（令和 6）年 2 月 2 日に調査票が送付された。2 度の督促を経て最後の回答は 2024（令和 5）年 5 月 29 日に受け付けられたものである。集計は例年と同様、本調査の目的に鑑み、単純集計の他に通算志願者数、合格者数を重みとして用いた。

## 3. 結果

### 3.1. カバー率

調査設計段階で調査対象校として選定された学校は全国の高等学校等のうち 6.9%に過ぎないが、全志願者数基準では 83.1%、全合格者数基準では 86.2%が調査に含まれた。

### 3.2. 回答校のプロフィール

269 校からの回答が得られた<sup>6</sup>。返送率は単純集計で 77.3%、全志願者数重みで 86.5%、全合格者数重みで 87.6%であった。設計段階のカバー率に返送率を乗じた実質カバー率は全志願者重みで 71.9%、全合格者数重みで 75.9%に達した。したがって、調査結果は東北大学に志願者を輩出する高校の意見を代表したものと言える。

表 1. 東北大学の入試に関する知識

	1. よく知っている	2. ある程度知っている	3. あまり知らない	4. ほとんど知らない
単純集計	101 (37.4%)	162 (60.0%)	6 (2.2%)	1 (0.4%)
全志願者重み	34,085 (61.4%)	20,670 (37.2%)	493 (0.9%)	258 (0.5%)
全合格者重み	11,646 (61.4%)	7,112 (37.5%)	172 (0.9%)	53 (0.3%)

東北大学の入試に関する知識と関心について 4 段階評定で質問した結果を表 1、表 2 に示す。「知

高度教養教育・学生支援機構における人間を対象とする研究の倫理審査に関する申し合わせ（東北大学高度教養教育・学生支援機構、2014）」における研究倫理審査委員会の審査対象外である。

<sup>2</sup> 「令和 3 年度入試の前」と比較して「進学指導がやりにくくなったことがあるとすれば」その原因は何だと思いか、と尋ねた。「1. ほとんど関係ない ～ 5. 大いに関係がある」の 5 段階評定である。

<sup>3</sup> 「31. その他」は分析から除外した。さらに、「30. 受験産業にかかわる問題」が回答期間の前半において WEB サイトに掲示した質問紙から漏れていたため、分析から除外した。

<sup>4</sup> 「令和 3 年度入試の前」と比較して、全体として進学指導がどのように変化したかを尋ねた。「1. かなりやりやすくなった ～ 5. かなりやりにくくなった」の 5 段階評定である。

<sup>5</sup> 「1. 全く評価できない ～ 5. 大いに評価できる」の 5 段階評定に加え、「0. 知らない、分からない」の計 6 肢択一である。

<sup>6</sup> 同一校名で 2 つの異なる学校組織を持つ 1 校から 2 つの回答が得られた。いずれも有効としたが、回答校数に重複はない。

識」の選択肢は「1. よく知っている」～「4. ほとんど知らない」, 「関心」は「新指導要領の下で令和7年度から始まる東北大学の入試」に対して「1. 強い関心がある」～「4. 全く関心がない」である。

表 2. 令和7年度からの東北大学の入試への関心

	1. 強い関心がある	2. ある程度関心がある	3. あまり関心がない	4. 全く関心がない
単純集計	183 (68.3%)	84 (31.3%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)
全志願者重み	45,066 (81.9%)	9,883 (18.0%)	71 (0.1%)	0 (0.0%)
全合格者重み	15,660 (83.3%)	3,104 (16.5%)	27 (0.1%)	0 (0.0%)

### 3.3. 進学指導を取り巻く環境

進学指導のやりにくさに関する総括評価の集計結果は表3に示す通りである。全体としては「4. 少しやりにくくなった」との評価が最も多い。重みづけ集計を行った場合には「5. かなりやりにくくなった」の比率がやや高くなっている。

表 3. 令和3年度入試の前と比較した進学指導

	1. かなりやりやすくなった	2. 少しやりやすくなった	3. 変化はない	4. 少しやりにくくなった	5. かなりやりにくくなった
単純集計	3 (1.1%)	20 (7.4%)	98 (36.4%)	132 (49.1%)	16 (6.0%)
全志願者重み	760 (1.4%)	4,236 (7.6%)	19,787 (35.7%)	24,323 (43.9%)	6,363 (11.5%)
全合格者重み	304 (1.6%)	1,455 (7.7%)	6,826 (36.0%)	8,359 (44.1%)	2,023 (10.7%)

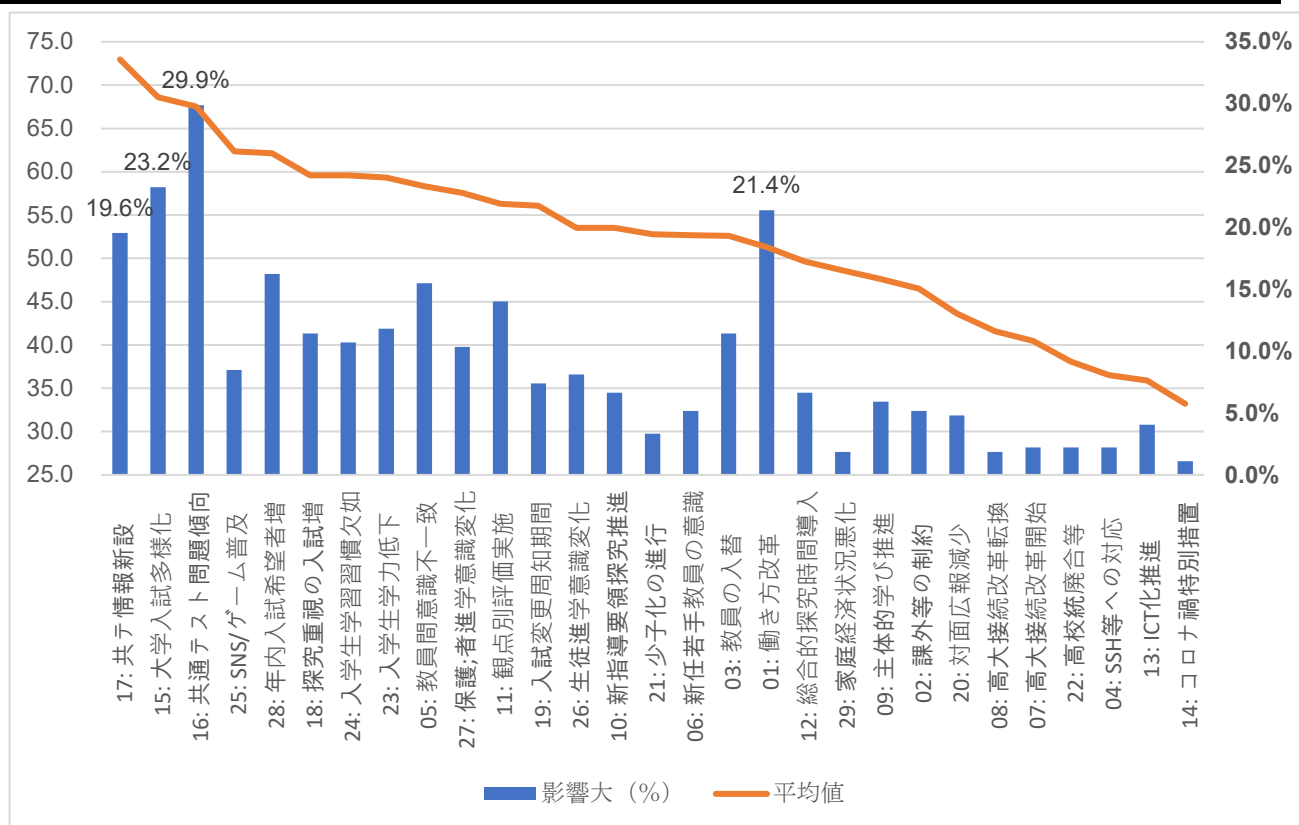


図 1. 「進学指導のやりにくさ」に影響を与えた要因

項目別の分析結果を図1に示す。5段階評定の結果は1～5を0～100に変換した上で平均値を示した。目盛りは左端の第1軸に示す。縦棒グラフは「進学指導のやりにくさに特に影響を与えた」3項目に挙げられた比率であり、右端の第2軸に従う。図1は5段階評定の平均値の降順で示している。

尋ね方によって一部の結果が異なることが分かる。「25. SNS, オンラインゲーム等の普及」は5段階評定の平均では4番目に高い値を示したが、「特に影響を与えた」要因には挙げられていない。逆に、「1. 働き方改革の推進」は平均値としては大きくないが、「特に影響を与えた」要因の比率が高い。

次に、5段階評定結果を尺度化するために、探索的因子分析を行った。スクリープロットに基づくカイザーガットマン基準によって、4因子が適当と判断した。主因子法により因子を抽出し、プロマックス回転を行った。その結果得られた因子構造を表4に示す。

表4. 「進学指導のやりにくさ」の要因の因子分析結果（プロマックス解）

項目	因子構造行列			
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
24: 入学生学習習慣欠如	<b>0.85</b>	-0.13	0.02	0.03
23: 入学生学力低下	<b>0.77</b>	-0.00	0.01	0.01
25: SNS / ゲーム普及	<b>0.63</b>	0.06	0.04	0.04
26: 生徒進学意識変化	<b>0.59</b>	0.07	0.12	0.06
27: 保護者進学意識変化	<b>0.57</b>	0.07	0.20	-0.01
29: 家庭経済状況悪化	<b>0.57</b>	0.08	-0.05	0.12
28: 年内入試希望者増	<b>0.43</b>	0.20	-0.02	0.10
21: 少子化の進行	<b>0.33</b>	-0.04	0.13	0.27
22: 高校統廃合等	<b>0.33</b>	0.19	0.12	0.09
10: 新指導要領探究推進	0.01	<b>0.95</b>	0.03	-0.19
12: 総合的探究時間導入	0.06	<b>0.82</b>	-0.03	0.01
09: 主体的学び推進	0.05	<b>0.66</b>	0.18	-0.12
18: 探究重視の入試増	0.00	<b>0.57</b>	-0.17	0.35
11: 観点別評価実施	0.09	<b>0.50</b>	-0.00	0.05
02: 課外等の制約	0.01	-0.05	<b>0.66</b>	0.08
01: 働き方改革	0.07	-0.02	<b>0.63</b>	0.06
06: 新任若手教員の意識	0.25	-0.01	<b>0.56</b>	-0.05
05: 教員間意識不一致	0.28	0.00	<b>0.56</b>	-0.12
07: 高大接続改革開始	-0.21	0.19	<b>0.54</b>	0.31
08: 高大接続改革転換	-0.17	0.18	<b>0.53</b>	0.31
03: 教員の入替	0.33	-0.04	<b>0.51</b>	-0.10
19: 入試変更周知期間	0.02	-0.04	0.08	<b>0.68</b>
20: 対面広報減少	0.16	-0.19	0.01	<b>0.54</b>
14: コロナ禍特別措置	-0.01	-0.02	0.16	<b>0.53</b>
15: 大学入試多様化	0.10	0.23	-0.06	<b>0.53</b>
17: 共テ情報新設	0.23	0.00	-0.07	<b>0.48</b>
16: 共通テスト問題傾向	0.36	0.21	-0.12	0.32
13: ICT化推進	-0.03	0.30	0.24	0.17
04: SSH等への対応	-0.01	0.35	0.36	-0.08
	因子間相関係数			
第2因子	0.33	—	—	—
第3因子	0.39	0.41	—	—
第4因子	0.34	0.47	0.37	—

表 4 に基づき、第 1 因子 9 項目を「生徒側の要因」、第 2 因子 5 項目を「教育政策の要因」、第 3 因子 7 項目を「教員側の要因」、第 4 因子 5 項目を「大学側の要因」と命名した。

次に、それぞれの因子ごとに項目の「1~5」の評定値の単純和を求めて尺度化した。それぞれの尺度の信頼性係数の推定値  $\alpha$  を算出したところ、「尺度 1：生徒側の要因」は  $\alpha = .86$ 、「尺度 2：教育政策の要因」は  $\alpha = .84$ 、「尺度 3：教員側の要因」は  $\alpha = .83$ 、「尺度 4：大学側の要因」は  $\alpha = .73$  となった。十分な信頼性を有する尺度が構成されたと言える。そこで、総括評価を基準変数、4 つの尺度を説明変数として重回帰分析を行った。その結果を表 5 に示す。有意水準を 5% として、「尺度 3：教員側の要因」が「進学指導のやりにくさ」の説明変数として有意であることが分かった。なお、モデルは全体として  $F_{(4,258)}=9.06$  ( $p<.0001$ )、調整済み  $R^2=.11$  と、一定程度の説明力を有する。

表 5. 「進学指導のやりにくさ」総括評価の各尺度への回帰

	係数	t	p
尺度 1：生徒側の要因	-0.002	-0.20	.843
尺度 2：教育政策の要因	-0.001	-0.05	.960
<b>尺度 3：教員側の要因</b>	<b>0.035</b>	<b>3.76</b>	<b>.000</b>
尺度 4：大学側の要因	0.027	1.87	.062

### 3.4. 東北大学の入試改革や広報活動

東北大学における特徴的な入試制度のうち、評価の平均値が高かった順に「1. 学力重視の AO 入試 (81.5)」、 「5. 個別学力試験重視の配点変更 (77.8)」、 「6. オンライン入試説明会導入 (75.5)」、 「4. 前期日程試験『国語』試験時間延長 (68.5)」、 「2. AO 拡大募集人員比 3 割方針 (68.2)」、 「3. 主体性評価導入と活用 (58.6)」の順となった。なお、( ) 内の数値は先述の変換値である。

「東北大学の入試制度等への評価」に関する 6 項目の合計点を 1 次元尺度とみなして基準変数とし、前項で作成した 4 尺度を説明変数として重回帰分析を行った結果を表 6 に示す。有意水準を 5% として、「尺度 1：生徒側の要因」、「尺度 2：教育政策の要因」の 2 つの尺度が「東北大学の入試制度等への評価」の説明変数として有意であることが分かった。「尺度 2：教育政策の要因」の係数は負の値であり、進路指導のやりにくさの原因が「教育政策の要因」にあると考えるほど、東北大学の入試制度等は評価しない、という結果である。なお、モデルは全体として  $F_{(4,254)}=4.00$  ( $p<.001$ )、調整済み  $R^2=.04$  と、一定程度の説明力を有する。

表 6. 東北大学の入試制度等への評価の各尺度への回帰

	係数	t	p
<b>尺度 1：生徒側の要因</b>	<b>0.10</b>	<b>2.43</b>	<b>.016</b>
<b>尺度 2：教育政策の要因</b>	<b>-0.21</b>	<b>-3.44</b>	<b>.001</b>
尺度 3：教員側の要因	0.04	0.74	.460
尺度 4：大学側の要因	-0.02	-0.32	.746

表 6 の結果を受け、東北大学の入試制度に関する知識・関心の 2 項目を 1 次元尺度とみなして説明変数とし、表 6 の分析で有意であった 2 つの尺度に加えて 3 変数の説明変数による重回帰分析を行った結果を表 7 に示す。なお、解釈の方向性を統一するために、「東北大学の入試制度に関する知識・関心」は尺度の向きを逆転した上で回帰式に投入した。これらの 3 つの説明変数はそれぞれ説明変数として有意となった。なお、モデルは全体として  $F_{(4,257)}=13.34$  ( $p<.0001$ )、調整済み  $R^2=.12$  となり、表 6 と比較して強い説明力を有する。

表 7. 東北大学の入試制度への評価の知識・関心を加えた回帰

	係数	t	p
<b>尺度 1：生徒側の要因</b>	<b>0.10</b>	<b>2.65</b>	<b>.009</b>
<b>尺度 2：教育政策の要因</b>	<b>-0.19</b>	<b>-3.27</b>	<b>.001</b>
<b>東北大入試に対する知識・関心</b>	<b>1.37</b>	<b>4.83</b>	<b>.000</b>

#### 4. 考察

全体として言えば、高大接続改革以前と比べて大学進学指導は「少しやりにくくなった」との評価であった。高大接続改革は歴史的な出来事であり、現在まで続く様々な政策にも影響を与えている。しかし、高校教育の現場は次々と起こる現象に翻弄されており、一つひとつの事象の因果関係を関連付けて認識するには至っていないようである。その結果、大学入学共通テストに関わる 2 つの項目、大学入試の一層の多様化といった、入試制度の直接的変更が進学指導のやりにくさの原因として認知される結果となった。なお、高大接続改革に関連する 2 項目が、因子分析の結果「尺度 2：教育政策の要因」ではなく「尺度 3：教員側の要因」に含まれたのは興味深い。政策それ自体よりも、個々の教員政策の受け止め方の違いが、進学指導のやりにくさにつながったとの認識とみられる。

やりにくさの総括評価には「尺度 3：教員側の要因」が有意に効いていた。教員のチームワークの悪さが進学指導のやりにくさにつながっているとすれば、教育委員会の方針やそれを受けた管理職の姿勢が鍵になる。今後、その点について深く掘り下げて分析を進めたい。

改革の流れに対応した東北大学の入試制度変更は、おおむね好意的に捉えられていた。しかし、個々の設計の意図の理解が十分に浸透していないことが伺える結果でもあった。進学指導のやりにくさの原因が「尺度 2：教育政策の要因」によると認知される傾向が強いほど東北大学の入試改革への評価が低かった一方で、東北大学の入試に対する知識・関心が深いほど評価が高かったことから、それが伺える。特に評価が低かった一般選抜におけるチェックリストに基づく主体性の評価方法は、高大接続改革の行方が見えない段階で「一般選抜における主体性の評価」という極めて困難な政策的要請に対して現場の負担を極限まで抑える工夫であったが、現在ではその経緯が忘れ去られているのだろう。

#### 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21H04409 の助成を受けた研究成果の一部である。

#### 文献

- 中央教育審議会 (2014). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について——すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために—— (答申) 平成 26 年 12 月 22 日. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf) (最終確認 2024 年 8 月 10 日) .
- 大学入試のあり方に関する検討会議 (2021). 大学入試のあり方に関する検討会議 提言, 令和 3 年 7 月 8 日. [https://www.mext.go.jp/content/20210707-mxt\\_daigakuc02-000016687\\_13.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210707-mxt_daigakuc02-000016687_13.pdf) (最終確認 2024 年 8 月 10 日) .
- 倉元直樹・宮本友弘・長濱裕幸 (2019). 「高大接続改革への対応に関する高校側の意見——東北大学の AO 入試を事例として——」『日本テスト学会誌』15, 99-119.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・長濱裕幸 (2023). 新学習指導要領下の高等学校における評価の問題——観点別評価と大学入試——, 日本テスト学会第 21 回大会発表論文抄録集, 94-99.
- 東北大学高度教養教育・学生支援機構 (2014). 「東北大学高度教養教育・学生支援機構における人間を対象とする研究の倫理審査に関する申し合わせ」2014 年 9 月 2 日. <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/cahe/wp-content/uploads/2011/04/91ba049642718499c6a1a395d0a50ce7.pdf> (最終確認 2024 年 8 月 10 日).